



## 敗戦者の屈辱を思ふ

屈辱を知らぬ

我等の幸福

悪戦能く常に善勝して而

も其の功に居らざる出征將士を始めとして前線任務に

つく一切の人々に對し絶大

の尊敬と感謝を捧ぐると共

に銃後優闇の遠家族に對

て最も功績を持つは言を俟

たる。然し乍ら明治以來の

個人主義傾向の餘弊未だ影

を消したりとせぬはけだし

止むを得ぬ處である。

◇ 日本の今日有る所以を案

じて之を歴史に顧み顧つ

て之を後世子孫に傳ふべき

責務を惟ひ、新しくして歩

一步使命の遂行せらるる

を念ふ時、一身の勳功も誇

張に當らず、一家の犠牲も

亦甘受して痛苦すべからざ

るを自覺するであらう。

◇ 由來、外戦の敗北、被征

服の屈辱を知らぬ日本民族

の幸福は、祖先に對する責務と共に凡そ忘られ勝ちである。

是を口吻に上すも心氣作は

ず、文章に書くも一片の史

過ぐる處州都悉く荒墟に

歸す、高麗の男女の被は

れ、殺戮を被る者舉げ

て、數々べからず

高麗忠烈に命じ宮嬢と

結婚都監役人を設けて

市井の婦女を漁り盡し

るに及び皇女高麗王に降

嫁するの定例を開く。王

朝之を呼ぶに公主の曾稱

文明を最も誇る白人の曾稱

を以てす。元使突厥を

斜間し子女無きも飛援し

て日夜を指かず、哭聲路

に満ち、怨泣の聲室に通

得します。使臣の本國(元)より来る者有らば則ち人々慨然として色を失ひ、相顧みて曰く何の爲めに来るか童女を取るに非ざるか、妻妾を奪ふに非ざると、軍吏四方に走り毎に探り戸毎に索ひ置す者有れば災ひをかしむれば又は其に求ひの隣里に及び親族をも束縛して之を離縛す』

其の隣里に及び親族をも束縛して之を離縛す』

日本民族の大實現論と云ふ始んど宿命とも云ふべき

基礎となつた先輩諸氏の幾多大陸雄飛への説は、尊

くも雄々しく後代我等の胸を打つ、殊に、その政策

の時代的な客觀性、合理性的是非は兎に角、あの歐風萬能、西歐文明講義の明治初年に於いて廟堂有司

諸公の大部分に向ふに題して論議、遂に本意なく敗れた大西郷の征韓論に現はれた彼の大陸への主張

を知ることは意義あることである。

○當時廟堂にあつては征韓論賛成者と云ふ宿命とも云ふべき

論をを中心に貢賄二派に分れて争ひ、この飛躍への説は、尊

い羅巴(ルーパ)の六倍もある亞細亞大陸に足を踏みます。此の不統一と叫び出してゐる

亞の不統一と叫び出してゐる

亞細亞大陸に足を踏み入れて置かんと、後日大

の土佐の坂垣 佐賀の江藤

韓の議は殆んどその留守を離れて明を失ふ。如斯の

外遊中大隈、大木等を征韓論賛成者であつた、岩倉

征韓論賛成者であつた、岩倉は西郷を押へて

て行はれた。その重なるものも、西郷の體動たる力

は遂にこれをしてぞぞけて征韓論賛成者であつた、

西郷等の悲壯な下野となつて、西郷は西郷の江藤

韓の議は殆んどその留守を離れて明を失ふ。如斯の

外遊中大隈、大木等を征韓論賛成者であつた、岩倉は西郷を押へて

て行はれた。その重なるものも、西郷の體動たる力

は遂にこれをしてぞぞけて征韓論賛成者であつた、

西郷等の悲壯な下野となつて、西郷は西郷の江藤

韓の議



